教育ひょうご

発行所 神戸市中央区中山手通4丁目10－8
兵庫県教職員組合
発行人 兵庫県教職員組合代表者 川原芳和
編集人 森戸卓也
電話 050（3538）2346
1部15円　年定価360円（組合員の購読料は組合費の中に含む）

2022/2・1
No.2040

・第44回母と女性教職員の会　兵庫県集会
・かえるのうたがきこえてくるよ#1
・「古賀ちかげ」さんに託したい私たちの願い

阪神・淡路大震災27年　児童・生徒、教職員

追悼の夕べ

1月17日、兵教組はリニューアルされたラッセホールで「阪神・淡路大震災27年　児童・生徒、教職員追悼の夕べ」を開催した。今年度も新型コロナウイルス感染症（以下、感染症）への対応により、規模を縮小し、ライブ配信を活用しての開催となった。参加者は、志半ばにして無念にも犠牲となった児童・生徒、教職員の方々に思いを馳せ、震災を語り継ぎ、その経験と教訓を生かす教育を推進する決意を新たにした。

伊藤進二さん（元EARTH員・協力研究所員）による語り、神戸市立御影北小学校合唱部（ビデオ出演）が、神戸市歌である「しあわせ運べるように」他3曲を追悼の歌として披露し、思いを届けた。

（兵教組ホームページの組合員専用ページに動画を掲載予定）







1．17への思い（抜粋）



川原芳和中央執行委員長

志半ばにして犠牲になられたみなさまのご冥福を心からお祈りするとともに、最愛の家族を失い、苦難の27年を生き抜いてこられたご遺族のみなさまに、心からのお見舞いを申し上げる。

震災以降に生まれた教職員が増えていく一方で、震災当時学校に勤務していた教職員の多くは退職を迎え、当時の様子を知る教職員は減少している。私たちは、毎年、1月17日にみなさまとここで再会し、阪神・淡路大震災の経験や教訓を忘れることなく、若い世代の教職員にしっかりと語り継ぎ、いつの時代にあっても子どもを中心にすえた教育の創造的復興にとりくんでいく決意を新たにしている。

この感染症の状況が続く中で、震災の教訓から学んだ「お互いに支え合い、励まし合い、困った時はお互い様」、このような当たり前の「共助」の人間関係づくりに、昨年策定した2030年ポストコロナ社会にむけた持続可能な学校づくりをめざした『兵教組第6次提言』を活用し、とりくんでいく必要があると実感している。

震災から5年目となる2000年4月に兵庫県教育委員会と連携・協力のもと立ち上げられた、教職員による「震災・学校支援チーム（EARTH）」は、海外ではトルコや中国、台湾、国内においては、中越や東日本大震災をはじめ様々な自然災害の被災地に駆けつけ、兵庫の経験をもとに復興・復旧、心のケア、学校再開にむけた支援、そして、ハンドブックの作成・改訂などにとりくんできた。その実績は高く評価され、国からも大きな賞を受けた。

また、教育活動においては、県教育研究集会における特別分科会の設置や、震災周年事業としての「震災シンポジウム」の開催など、海外の経験にも学びながら、被災した子どもの心のケアや地域防災体制の確立にむけた実践的なとりくみを、県内すべての地域で発展させている。さらに、震災により保護者を亡くした子どもたちに対する「わかば奨学金」基金のカンパ活動も学校厚生会とともに継続してきた。

こうしたとりくみの成果に立ち、教育実践や記録の継承をはかっていくため、教育会館・ラッセホール地階に震災資料室を2002年1月17日に開設し、「自立・連帯・共生」の教育の創造へむけて発信を続けている。

兵教組、学校厚生会は、これからも予測困難な時代を生きる子どもたちが夢や希望を持ち、成長が実感できるよう寄り添い、防災・減災教育をはじめとする教育実践の深化・発展、教育環境の整備など、引き続き努力していくことをお誓いする。



西上三鶴兵庫県教育長

県教委を代表して、犠牲になられた方々の御霊に、深く哀悼の意を表す。今日の復興は、震災により亡くなられた方や、負傷された方、財産を失われた方など、多くの犠牲の上にあることを、私たちは決して忘れてはならない。

私たちは、壊滅的な被害を受けたあの日以降、全国から駆けつけていただいた大勢のボランティアのみなさま方の温かい励ましや支援に感謝しつつ、教職員のみなさまと手を取り合いながら、様々な課題に一つひとつとりくみ、教育の創造的復興を実現してきた。その中で、命の尊さや助け合いの大切さ、ボランティア精神の重要性など、震災から学んだ教訓を語り継ぎ、人としての生き方を考えさせる「兵庫の防災教育」をすすめてきた。

学校においては、児童生徒が、地震だけでなく様々な自然災害に直面した時に、自らの命を守り、主体的に行動させる力を育んできた。また地域、関係機関と連携しながら、防災・減災意識を高め、防災訓練にもとりくんでいる。

阪神・淡路大震災から27年が経過した。この一年間は、幸いにして、兵庫県では大きな被害をもたらす地震や風水害などの自然災害に見舞われることはなかった。しかしながら、日本各地や世界では、依然として多くの災害が発生している。加えて、一昨年の新学期に長期にわたる臨時休業を余儀なくされた感染症との戦いは、その終息が未だ見通せない状況にある。マスクの着用、消毒、三密の回避が日常生活に浸透するとともに、教育活動も縮小、延期、中止などこれまで通りの実施ができない事態が続いている。

児童生徒だけでなく教職員でも震災を知らない世代が増える中、震災の教訓を伝え、継承していくとりくみにも支障が生じている。

新規採用教職員が研修として、県内外の被災地において災害ボランティア活動や県・市町の総合防災訓練等に参加してきたが、今年度は現地に行くことができないことから、やむなく、ICTを活用し、被災地とオンラインでつなぎ、震災体験の共有や、災害時の対応をシュミレーションすることなどにとりくんだ。

将来の地域防災の中心となる中高生が、防災ジュニアリーダーとして東日本大震災等の被災地に赴き、ボランティア等の活動にとりくむことも、縮小や日程の変更などをおこないながらのとりくみとなった。

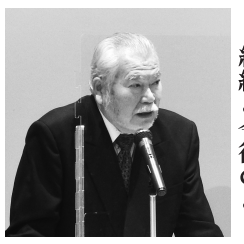
震災の経験と教訓を活かすため立ち上げた「震災・学校支援チーム（EARTH）」は、東日本大震災をはじめ、熊本県、岡山県、北海道などの被災地にいち早く駆けつけ、学校における避難所運営や学校教育の早期再開への支援、児童生徒、教職員の心のケアにとりくんできた。このことが理解され、教職員による支援チームが、熊本県、宮城県、三重県で発足するなどそのとりくみが広がってきた。

しかし、感染症の影響により活動を制限され、実践する力の継承に苦心をしているところである。

このように、震災の教訓を風化させないとりくみに厳しい課題を突きつけられているが、私たちは、阪神・淡路大震災の経験とともに、南海トラフ巨大地震や異常気象による災害が発生するおそれがあることなどを踏まえ、「備える」ことが重要であるとの認識を持っている。多くの知恵を出し合い、様々な工夫にとりくみ、これを克服していく。

語り

「EARTH設立の経緯と今後のとりくみ」



伊藤　進二さん

27年前の1月16日まで、阪神間で大きな地震が起きるなんて誰も考えていなかった。しかし、あのたった何秒かの地震が起きてしまったことが「EARTH」立ち上げのスタートになる。

阪神・淡路大震災後、まずおこなわれたのは子どもたちの心のケアである。子どもたちの心のケアを大事にしなければならないと私たちも徹底的に勉強してケアをおこなった。それと同時に「防災教育検討委員会」が立ち上げられた。そこでは兵庫の防災教育をどうすすめていくかが話し合われた。そこで兵庫県は「新たな防災教育」をめざすことになった。

「新たな防災教育」には三つの柱がある。一つ目は、安全教育の充実。二つ目は、自分の命を守る、他の人の命を守る防災教育。三つ目は、人間としてのあり方、生き方を考えさせる心の防災教育。この三つがすすめられるようになった。

それらを推進していくために、「教育復興担当教員」（以下、復興担）が県内で207人配置された。復興担の仕事は、三つの柱に沿って、学校の中でリーダーとして防災教育をすすめていくこと。だから復興担は学期ごとに研修会に参加し、学んだことを学校に環流する。復興担のいない学校には、復興担がその地域の研修会をおこない、防災教育をすすめた。

1999年8月17日にトルコで大きな地震が起こった。その時に、兵庫県から支援に行き、学校教育の復旧について支援をおこなった。また、同じ年の9月21日に台湾で大きな地震が起きた。台湾の日本人学校から、文部省（当時）を通じて兵庫県に「子どもたちの心のケアをしてほしい」と要請があり、当時の復興担が派遣された。派遣されてから何度も地震があった。地震のあった翌日、子どもたちの顔を見ると、調子が悪そうな子や授業中に泣き出す子もいた。そのような子どもたちの心のケアを現地の教職員とともにおこなった。また、保護者を集めて研修会もおこなった。

阪神・淡路大震災で経験してきたことや兵庫がとりくんできた養成講座、復興担の研修会などの知識や経験をいかし、2000年1月17日に「EARTH」が設立された。

「EARTH」は当時90人の隊員と臨床心理士5人の95人で構成されていた。新潟に派遣されたとき、ある避難所で、「阪神・淡路大震災の時は、私たちは他人事だった。神戸は大変だなと思いながら見ていた。その兵庫の方が、ここまできて助けてくれている」と泣きながら話されていた。私は、「これから違う地域で何かあったらお返ししないといけないね」と話した。各地域でその「お返し」できる人材をつくっていかなければいけない。

95人でスタートしたEARTH員は現在243人になっている。震災を経験していなければEARTH員になれないということはない。私たちが語り継いでいかなければいけないし、このような思いでつくられた「EARTH」が、さらに日本全国の学校や園の防災教育をすすめていく柱になることができる。災害は起こってほしくない。しかし、災害が起こった時に、被害が最小限で済むようにどうすればいいかを教えるために「EARTH」がある。そんな指導ができる「EARTH員」を育てていきたい。兵庫が「防災」を疎かにし、悲しい思いをする子どもや保護者が出ないようにしなければならない。



▲追悼の思いを込めて合唱を披露した
神戸市立御影北小学校合唱部のみなさん（ビデオ出演）

第44回 母と女性教職員の会 兵庫県集会

子どもたちに平和な未来を
～誰もが安心してくらせる社会であるために～



1月22日、「第44回母と女性教職員の会 兵庫県集会」をオンラインで開催し、県内各地域から約130人が参加した。

全体会では、川原中央執行委員長あいさつの後、水岡俊一参議院議員と北野聡子宝塚市議会議員より、連帯のあいさつがあった。

基調提案では、全国母女の会50周年を迎えた時に作成された動画を視聴し、「母女の会」の運動がどのような思いで始まり、今につながっているのかについて、参加者で共有した。

また、福山中央執行委員が「母女の会は、1953年から『憲法を変えると、お母さんや子どもを守ることができなくなります』と訴え、『憲法・平和・教育を守る』運動を積み重ねてきた。今、改めて母女の原点に立ち戻り、『子どもたちに平和な未来を』引き継ぐために、つながろう。『わが子、教え子を再び戦場に送らない』ために、幅広い連帯のもと、知恵を出し合い行動していこう。そして、未来を生きるすべての子どもたちのために、憲法と平和を守るとりくみをすすめていこう」と呼びかけた。

分科会

①「子どもの人権を考える」

第1分科会では、谷口吉一さん（西宮）が『ともに』学びあう学級・学校をめざして～子どもどうしをつなぎ、分けないために～」と題し、問題提起をおこなった。谷口さんは、「組合運動の中で『ともに生き、ともに学ぶ』教育に出会い、『子どもを障害の有無で分けることは差別だ』と教えられ、自分自身が子どもを分けようとしていた差別者であることに気づいた。クラスにはいろいろな子がいて、それぞれの個性がぶつかり合うから喧嘩もするし、トラブルも起こる。しかし、それは、互いに学び合い成長するきっかけだと思う。トラブルを恐れていては、子どもの成長はない。ぶつかり合うからこそおもしろいと思うし、そこに学びや成長が生まれるのだと思う」と「ともに学ぶ」この大切さを語った。



第1分科会

参加者からは、「幅広い価値観をもつ子どもたち全員がわかり、学ぶ価値を見出せるような授業、居心地がいい学級づくりをしていかなければならないと改めて思った」、「子どもたちの話や思い、保護者の願いなどをしっかり聞くということは大切であること、子どもの中で子どもは育つことを再認識し、これからの実践に生かしていきたい」、「特別支援学級の子どもが授業を自由に選択できるような体制が必要だと思った」などの感想が寄せられた。

②「性別にとらわれず自分らしく生きる」

第2分科会では、藤本拓弥さん（氷上）が、「私たちの意識から変えるジェンダー平等教育～子どもたちへの授業実践を通して～」と題し、問題提起をおこなった。藤本さんは、「これまで子どもたちは、体の性のグループに分かれて遊ぼうとしたり、持ち物や服装においても『男の子らしい』『女の子らしい』と分ける発言が多かった。しかし、様々な学習や実践を通して、『さんづけ』している子どもが増えたり、『違和感』を教員に伝えられるようになった。子どもたちだけでなく、教職員もアンテナを高くもてるようになり、気軽にジェンダー平等教育に関する話題が職員室で飛び交うようになった」と自分自身や職場全体の意識から変えていくことの大切さを語った。

参加者より、「教職員の意識を変えるだけでも、大きく変わっていけるのだと改めて感じた」、「ジェンダーを含め、『みんなちがってみんないい』という、個性を尊重するような社会になればいいなと思う」、「子どもたちが自分で水着なども選べるようにするなど、自分で選べるということが大事だなと思う。当たり前を見直す機会になった」などの感想が寄せられた。

かえるのうたが♬きこえてくるよ(^^♪

#1 気づき









教員の残業代

給特法では、教員の仕事とは勤務時間の管理が難しいということで、休日勤務手当や時間外手当を支給しない代わりに給与月額の４％を教職調整額として支払うことを定めているんだ。

第26回参議院議員選挙日政連比例代表候補予定者

古賀ちかげ

子ども　くらし　平和



Twitter　Web

「古賀ちかげ」さんに託したい私たちの願い
～その①～

組合員からの声

少人数学級の推進、教職員定数の改善を！
加配・人の配置を！

「古賀ちかげ」さんの思い

今後、小学校は35人学級が順次実現していくものの、中学校への少人数学級の導入をはじめ、さらなる少人数学級の実現が必要です。子どもたちへのきめ細かな指導を実現するためにも、精一杯とりくんでいく所存です。

全国的に大きな影響を及ぼしている「教職員不足」の問題。産育休・病休が取れないという現場の現状を変えなければなりません。教員免許更新制が廃止の方向性ですが、さらに、魅力ある学校づくりにむけて、みなさんからの声を国会に届けます。



「古賀ちかげ」さんへの応援メッセージ ありがとうございます！

みなさんにとりくんでいただいた「七夕プロジェクト」や「クリスマスプロジェクト」の短冊・カード一つひとつに込められたメッセージや願いに対する「古賀ちかげ」さんの思いをシリーズ化して掲載する。

自動車共済

「教職員」のための制度を追求しました！



「公務中」「通勤中」の事故は等級ダウンなし！

公務や通勤で車をよく使うから事故が心配…



公務中の事故　どの契約コースでも「等級据置」だから更新時の**掛金アップなし！**

通勤中の事故　補償充実コース６等級以上なら「等級据置」だから更新時の**掛金アップなし！**

１共済期間につき１回

ご契約にあたっては必ずパンフレットおよび重要事項等説明書（契約概要・注意喚起情報）をご覧いただき、制度内容をご確認ください。

教職員共済

〈資料請求・お問い合わせは〉

教職員共済生活協同組合
兵庫県事業所

〒650-0004
神戸市中央区中山手通４丁目
10-8 ラッセホール４F

電話　(078) 221-9730
FAX (078) 221-1199

掛金のお見積りもWEBでカンタン！　教職員共済　検索　https://www.kyousyokuin.or.jp/

承 20-56-03 (2007)